
とある魔法使いの片思い？

チョコましゅー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔法使いの片思い？

【コード】

N3222M

【作者名】

チヨコましゅー

【あらすじ】

霧雨魔理沙きりなまほりは恋をしていた。しかし相手はそんな事をしてかき
らずか普段通りの態度。
そんな恋する乙女の行方は……………？

（前書き）

この作品は東方projectの二次創作です。

誤字や脱字、キャラの名前や性格、喋り方がおかしかったかもしれませんが、気にせず読んでいただけたら幸いです。もし気になるようでしたらクレームをしていただければと思います。頑張って直してみます。

それではお楽しみいただけたら幸いです。

これが、いわゆる恋というものなのかはわからない。
まわりの環境が普通と違うということもあり、教えてくれる人もいない。

ただこの正体不明な気持ちは、日に日に私の胸を締め付けていく。

「魔理沙ー？ 人の話聞いてる？」

「え、あ、なに？」

「最近ボーツとしてるわねえ。風邪でも引いた？」

そういつてコイツは自分の額を私の額にくつつけてくる。

「んー、熱はなさそうね」

「私が風邪なんかひくかよ。んで？ なんの話だつて？」

なるたけ冷静に返答をする。でも、表情に出さなだけで内心ドツキドキだったりする。

…………… やっぱり私はコイツのことが好きなのかなあ？

「レミリアの話。最近うちにこないなあーって」

寂しそうな顔でそんな事を言う。そんな顔を見て、私の胸がチクリと痛むのはやっぱり好きだからだろうか？

「会いたいなら、自分で会いにいけばいいじゃないか。紅魔館までなんてひとつ飛でいけるだろ」

「別に会いたい訳じゃないのよ。ただ暇なときは話し相手が欲しいなーって。そのてんアンタや翠香はけっこー来てくれるからうれしいのよ？」

「私はただの暇つぶしの相手か」

「ん？ なんか言った？」

「何でもないぜ」

そういつて、私は縁側から腰を浮かす。

「あら？ どちらに行くの？」

「今日はアリスとキノコ狩りの約束があるからな。いっぱいいたらオマエにもお裾分けしてやるぜ？」「期待しないで待ってるわ」
お茶をずずつ、とすする。その顔は本当に期待なんてしていないようだった。

「じゃあ行ってくるぜ」

「行ってらっしゃい」

私は箒にまたがり森の方に飛んでいった。

魔理沙はそのまま森の方へ飛んでいってしまった。

話し相手がいなくなった私はそのまま縁側に寝転がる。

「まったく。人の気も知らないで」

「ごろごろと寝返りを打つ。」

「あらあら、随分と暇そうね」

どこからかそんな声が聞こえた。声で誰かわかるから、私は振り向いたりはしない。

「なんか用？」

「ふふつ。想い人が行っちゃったから機嫌が悪いのかしら」

「うるさいわね。アンタには関係ないでしょ」 私は立ち上がりこたつのある部屋に向かう。やはりこの季節は日が陰ってくると少し肌寒い。

「せっかく話し相手になってやるうってのに、ぞんざいな扱いじゃない」

「あなたはなんか裏がありそうでイヤなのよ。で、紫^{ゆかり}。何の用？」
振り向きざまにその声の主に呼びかける。

その女は空中にできたひび割れから半身をだし、ひじをついてこちらを見ていた。

スキマ妖怪、八雲紫^{やくもゆかり}。この幻想郷最強と呼び声の高い、古くから

この幻想郷にいる妖怪だ。ある出来事で知り合いそれからと言うものの、こうして人にちよっかいを出してくる。

「裏なんて無いわよ。私は霊夢が気に入っているからこうして顔を見に来てあげてるっていうのに」

「ならお賽銭入れて行きなさいよ。そうすれば多少は感謝の気持ちを見せてあげるわよ」

「私がお賽銭したところで何も変わらないわよ。それよりも」スキマから出てきて私の向かい側に座る。当然こたつの中に。「そんなに魔理沙が好きなの？」

私は招かれざる客に対してお茶を入れに行く。まあ自分の分がなくなつたなからついでではあるけど。

お茶と一緒に茶菓子を持ってこたつに戻り、紫の問いにお茶を一口すすって答える。

「別に好きって言う訳じゃないわよ。ただ、あの子の態度が分かり易すぎだから、いやでも意識しちゃうのよ」
「そして意識しているうちに、自分も好きになっていった、と」

「そんなんじゃないって言うてるでしょ。魔理沙は女の子よ？ 私と同性じゃない。好き嫌い以前の問題よ。ただ……」

あることを口にしようとしてつい口ごもってしまつ。紫はそこを、その隙を見逃さない。

「ただ、何かしら？」

こたつ机に顔をのっけて、ニヤニヤする。まるで自分の家の用にくつろいでいる。

「その続きはなに？」

「…何でもないわ」

私はそのまま寝そべる。天井を見て、もう一度同じ言葉を言う。

「何でも、ないわ」

「霊夢にないがしろにされたからって、いちいち私のところにこないでよね」 私は自分の向かい側に座る黒い魔法使いにそう言うてる。私の言葉が聞こえていないのか、それとも毎回辛辣にあたる私の態度になれているのか、しょんぼりとうつぶむいたままだ。

「はあ、とため息をつきつつ席から立ち上がる。」

「飲み物、紅茶しか無いけど良いわね？」

「ああ。かまわないぜ……」

「こつちがかまうつてのよ。内心そんな事を思いつつ、台所に立つ。」

「上海^{しゃんはい}。私の部屋からダーズリン持ってきてくれないかしら」

私は肩に座っている人形に向かって話す。人形はコクンと頷くと、紅茶を取りにフワフワと飛んでいく。

「私はお湯を沸かしながら、茶菓子の用意をする。」

「よっし！ 落ち込むの終了！」

黒い魔法使い、魔理沙が気合いの一声と共に、ガタンと立ち上がる。

「あら、今日は早いじゃない」

「いつもなら30分くらいどんよりと沈んでいるのに、今日はまだ5分くらいだ。」

「今日はあまり沈むようなことは言われてないからな。どちらかというと自分の心の狭さに自己嫌悪してたくらいだぜ」

「ニカッといつものイタズラ好きの子供のような笑みを浮かべる。」

「どうやら本当に今日は立ち直ったらしい。」

私は上海が持ってきたダーズリンを淹れ、茶菓子と一緒にテーブルに持って行く。

「話くらい聞いてあげるから、とりあえず座りなさいよ」

私は座りながら、魔理沙にも座るよう促す。

「ああ、いつも悪いな」「悪いと思っっているのなら、たまには私以外のところに泣き込みに行けばいいじゃない」

「こんな話」座るとともに茶菓子に手を伸ばしながら言う。「こんな話、お前にしか出来ないぜ。なんたってお前は私の親友だから」

な

「私が聞き上手だからでしょ？ 思ってもいないことを口にしないでよ」

そう言っつて私はダージリンを口にする。

人の気も知らないで親友だなんて。

「照れるなつて。私は友達が多いけど、親友となるとなかなかないぜ？」

「はいはい。ありがたいわ」

私は適当に返事をして、また紅茶を飲む。

魔理沙の方をちらりと見ると先ほどまで沈んでいたのが嘘のように満面の笑みでパクパクと茶菓子を頬ばっている。

私はもう一度、はあっとため息をつく。

何で私がこんなやつに優しくしてあげてる（これで優しいのか？

と思う人もいるかと思うが、そもそも私は他のやつとは付き合いがあまりない）かというところ、それには一つ訳がある。それは深いよ
うで、けれど単純なことだ。私、アリス・マーガトロイドはこの黒い魔法使い、霧雨魔理沙きりふまくりさに惚れてしまったからである。

（なにが不覚かって言つと、惚れた相手がこんなに単純バカで鈍感だつて言つ事よね）

私は、これで三度目になるため息をつく。ため息は幸せを逃がすと言つが、実際は幸せが遠ざかっているからこそため息が出てしまふんじゃないだろうか。

「なあ、アリス」

いつの間にか茶菓子を食べている手を止め、真剣な眼差しで私の方を見ている。

「……なに？」

私は目を伏せたまま耳をかたむける。

「私はお前が親友だと思つからこそこんな相談をしてるけど、お前はなんでこんな話を毎回ちゃんと聞いてくれるんだ？ はつきり言つて、聞いてて楽しくないだろう」

「たしかに、楽しくはないわね。それでも…」

紅茶をテーブルにおき、手を組みその上に顔をおく。

「私はアンタのこと、けっこう好きなのよ。だから、あんたが悩んでるなら、相談事くらい受けてあげてもいいと思ったのよ。まあ聞いてあげる位しか出来ないけど」

「そう。それならいいんだけどな」

魔理沙は微妙に納得はしていなそうだった。

私自身も納得はしていない。まるで模範解答のような受け答えだわ。そんな事を内心思う。

自分の気持ちを隠して、今の、隣にいて居心地のいいというポジションから動こうとしていない。だから好きな相手から、恋愛の相談事を持ちかけられてしまう。

頼られるのはうれしい。けどその相談内容は正直複雑な思いだ。

いや、聞いてて自分の胸が痛むのがわかる。

(だからって、むげにも出来ないし、どうしたらいいのよ?)

そんな事を思うが、その解決方法ならとくにおもいついてはいない。でもそれは出来ない。それをしてしまったら確実に今の関係が壊れてしまう。

そんな事は、怖い。出来るわけがない。

だから私は自分の心に傷を負ってでも、心が壊れないよう逃げるだけ。

「じゃあ、キノコ狩りにでも行くか」

いつも通りの笑顔を私に向けてくる。

その大好きな笑顔さえも、今は私の胸を痛めてしまう。

「霊夢、いるか?」

「そりゃいるわよ。ここは私の家よ?」
「というか、さも当然のように無断でうちにあがるなって何回言えばわかるのよ」

霊夢の家のこたつがある部屋のふすまを開けると、こたつの中でだらけきった霊夢がいた。

「ん、なんだ紫もいるのか」

「私がいちゃ何か都合が悪いのかしら？」

「いや、そんな事無いぜ。好きなときに遊びに来てかまわないぜ」

「ここはアンタン家かつ」

霊夢のツツコミをスルーしてこたつの中に入る。当たり前だが、まだ冬ではないから電源が入っていない。

「しかしこの家は年中無休でこたつがあるな。夏とか邪魔じゃないのか？」

テーブルの中央にはこたつの相方、みかんが置いてある。私はそれを無視して隣の茶菓子に手を伸ばす。

「夏にはちゃんとしてまってるわよ」

霊夢は変わらずぐでつ、とこたつに突っ伏したままだ。多分紫と何かを話して、ノックダウンされたんだらう。

「そついえば、アンタキノコは？」

「今日はなんか知らんが採れなかったんだぜ。実験用には何個か採れたんだけどな」　まるでだれかが根こそぎかつさらって行ったかのようになかった。

「え〜。じゃあ今日の夕飯どうするのよ？」

「期待してなかったんじゃないのかよ。というか、キノコだけで夕飯にするつもりだったのかよ。怠惰にもほどかあるぜ」

「あら、キノコだけでも色んな料理が出来るのよ？　炊き込みご飯にソテー、スパゲッティに使うのも良いし茶碗蒸しだってキノコが入る。他にも…」

「それはキノコが使われる料理だろ。お前のレパートリーじゃないぜ」

とりあえずつつこんどく。

でも、夕飯がないのか。じゃあここにきた意味がないな。

「毎回毎回あんたはうちにご飯を食べに来てるのか。いい加減食費

払わすわよ」

「ケチケチすんなよ。なあ紫」

霊夢から目を離し、紫の居る方を見る。するとそこにいたはずの紫がいなくなっていた。

「あれ？ 紫は？」

「静かだと思っただらいつの間にか帰ってたのね。ほんと、マイペースなんだから」

お茶がきれたらしく立ち上がる。霊夢もけっこいなマイペースだと思っただ。

「というか幻想郷の住人はみんなマイペースだぜ」

「何か言った？」

「何でもないぜ」

「…？ 変な魔理沙」不思議そうな顔をしてから、自分の持っている湯飲みに目を落とし、「あんたもなんか飲む？ お茶しかないけど」こっちに向かってそう言った。

「ああ。願いまするぜ」

「じゃあちよつと待っててね」そのまま霊夢は台所に向かっていく。

(なんだかんだ言いつつも面倒見がいいんだよな)

紫が飲んだであろう湯飲みを見てそんな事を思う。もしかしたら、私と仲良くしてくれているのも、そんな霊夢の性格ゆえかもしれない。そう思うと、やっぱり胸が少し痛む。

みんなと接するのと同じように私に接してくる霊夢。それは、私のことを特別視していないということ。

そんな事わかってる。わかってる……けど。

「はい、おまた…せえ！？」 霊夢が部屋に入ってくるなりやたらと驚く。

「…どうしたんだ？」

「こっちのセリフよ！ ど、どうしたのよ？ なんかあったの？」

お茶の乗ったお盆をテーブルに置くなり、慌てて私に近づいてく

る。

なんだかこんなに慌てている霊夢も珍しい。

と、そこで何かが頬を伝う。それでようやく自分が泣いているのだと気がついた。

「ねえ、大丈夫なの？」

「ああ、何でもないぜ」

涙を拭って笑う。

ああそうか。私はこんなにも霊夢が好きだったんだな。

「そう。はあ、心配して損したわ」

「心配かけて悪かったな。……………なあ霊夢」

私はこたつに入り淹れたてのお茶をすすってる霊夢に話しかける。

「…なに？」

「今から少しだけ変なことをいっていいか？」

「別にかまわないわよ。魔理沙が言うことは大半変なことだもん」

「私、霊夢のことが好きみたいだ」

私はお茶を見ながらそう言った。

霊夢は何事もなかったかのように、お茶を味わっている。やっぱり、私のことなんか気にもなってなかったのかな。

「知ってたわよ」

そんなマイナス思考を壊すように霊夢が言葉を紡ぐ。

「あんたが私に気がすることは知っていたわ。あんたは気づいてないだろうけど、態度でバレバレよ」

「な、な…あ」

「私はそれに気づいてから、意識しないように接するのが大変だったんだから」

霊夢の言葉に顔が赤くなっていくのがわかる。穴があいたら入りたいとはこんな時に使うものだ。

「でも、それで安心したわ」

「……………え？」 その台詞に私は霊夢の顔を見る。その顔はやさしく微笑んでいた。

「どついう意味だ？」

「だって、あなたが私のことを好きなら、私たちは両想いだってわかったんだもの。安心したと言うより、うれしくてしょうがなかったわ」

最初、その言葉の意味がわからなかった。けど、その後の霊夢の言葉ですべて理解した。

「私も、魔理沙が好きよ」

それから少し日が経って。

雪が程よく積もった神社の境内を私は歩いていた。今からあいつが居るであろうこたつの部屋へ向かう。

「なかなか積もってるな。これなら雪だるまを作れそうだけ。霊夢のやつを引つ張り出して雪遊びでもするか」 私は、そんなこと出来ないだろうなあと思いつつ、部屋の中に入っていく。

「おーっす。霊夢いるかー」

「あら、魔理沙。こんなクソ寒い中良く来たわね」

「おー、魔理沙。あたしもいるぞ」

「よお、翠香。…ってなんだその格好！ 寒くないのか？」

「んー？ 別にだぞ？」

「この子は鬼族だからこのくらいどーってことないのよ」

「なるほどなあー。よいしょっと」

「年寄り臭いわね」

「つい、な。あー、あつたけー……………ん？ 中になにか居るぜ？」

「あー、猫よ。黒猫。なんか表で寒そうにしてたからついつれて来ちゃったわ」

「お前があ？ そんな珍しいことをするから雪が降るんじゃないか？」

「私だつてたまには、ね」「あのかなー、霊夢が『なんとなく魔理沙に見えちゃったから連れて来ちゃった』って言ってたぞ」

「ちよつ、翠香！ そのことは内緒って言ったじゃない！」

「あれ？ そーだったっけ？」

「ふーん？」

「なにニヤニヤしてんのよ」

「いや、別に。ただ霊夢もかわいいところがあるなあって」

「…！ なつ！」

「おお！ 霊夢が真つ赤になったぞ。ゆでだこだ」

「ま、真つ赤になんてなつてないわよ」

「あはは。霊夢、かわいーぜ」

「う、うるさーい！」

こんな感じに、私たちは互いに好き合っていたけど、特に関係が変わることはなかった。ただ前よりも互いに一歩近づいた気はする。

それでも私たちはずっとこのままだろう。変わることもなく、この幻想郷の住人と暮らしていく。

ずっと。

いつまでも。

(後書き)

ご静読ありがとうございます。作者自身恋愛ものを書いたのは初めてで、これでよかったのか分かりません。

それでも全部読んでいただき心の底から感謝します。もしよかったら評価や感想などをいただけると嬉しいです。

では本当に読んでいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3222m/>

とある魔法使いの片思い？

2010年10月8日14時10分発行